

## C. ディケンズ小説の挿絵の差違について

—『ピクウィック・クラブ遺文』と

『ドンビイ父子商会始末記』の場合—

篠 三知雄

### はじめに

チャールズ・ディケンズはシェイクスピアと並んで今でも人気がある。特に英国では毎年ゆかりの地でお祭があり、種々の催物が行われ、テレビでは今までに映画化されたもの、新しく連続劇として作られたものなど、手を替え、品を替えて画面を賑わし、『オリヴァー・トウィスト』はもちろん『ニコラス・ニクルビー』のような長編まで劇化され、全国で巡演されている。大学の講義でも聴講者を多く集め、古本屋の棚にはさまざまな時代の、さまざまな版が並べられ、めぼしい古い版のものはたちまち姿を消してしまう。ある本のはしがきに、ディケンズの死後12年間で英国だけで4,239,000部売れたと書かれている<sup>1)</sup>。それ以後の、世界中での数を加えたと何千万という超ベストセラーの一人であることは確かだ、ディケンズは今も英国民の間で、世界の人の間で生きているのである。

在英中さまざまな版のディケンズを手にしてるうちに、当然のことながら、挿絵が目につき、古いらしい、生き生きとした絵に興味を持った。研究者やディケンズ愛好者なら常識というべきことであろうが、日本で手軽に購入できる版で数点の作品を読んだだけの筆者は挿絵については無知に等しかった。始めはすべて同一画家のもののように見えた。そのうち、G.クルークシャンク、R.シーモー、フィズという名を知った。そして、同じ作品でも版によって、絵の枚数が違うことに気づき、原型を知りたく思い、古い版を求め歩いた。幸い何冊かの初版本にもめぐり逢え、挿絵画家についての研究書を参照することができ、この方面について普通の知識は得られた。

その後、古い版にも相違があることに気づいた。同一画家による、同一場面にさえ相違がある。確かに同じ場面に2枚・3枚の版があるらしいことはわかったが、その全体はつかめず途方に暮れた。それがやっと *Nonsuch Dickensiana* by Arthur Waugh et al. (1937) を参照することによって溜飲を下げた。ところが、この中のトマス・ハットンによる一覧表も完全でないことを知った。明らかに違う挿絵でも、ハットンの表には1枚の記述しかないといった具合である。

手元にある資料が不十分なので、現時点でハットンの表を完全に補修することは不可能

であるが、幸い二つの作品の月刊分冊、松村昌家監修、復刻版『ピクウィック・クラブ遺文』（東京：名著普及会、1985）と『ドンビー父子商会始末記』（ロンドン：ブラッドベリィ・アンド・エヴァンズ社、1846～1847）、を参照できたので、ハットンの表を補いつつ、この両作品の挿絵について、その相違を見て行きたい。挿絵についてはキトンをはじめ多くの人が研究成果を発表してきた。それらの一部を参照したに過ぎない筆者があえてこの一文を草するのは利用できる資料の少ない現状をわが国の研究者に知っていただき、ご教示をいただきたいためである。

## 1

英国ヴィクトリア朝を代表する作家チャールズ・ディケンズは、世に出た始めから挿絵と密接な関係があり、助けられたと同時に、それによって悩まされた。時には「挿絵なぞ不要」と考えてる言動もあったらしい<sup>2)</sup>。しかし、全体としては彼の人気を高めるのに役立ったといえる。当時、小説に挿絵を入れることはむしろまれであった。ブロンテ姉妹、ジョージ・エリオット、ジョージ・メレディスといった人たちの作品にはさし絵はなかった。一部で、木版、石版、エッチング、鋼板エッチングなどにより、子どもの読物、イーガン『ロンドン生活』のような風刺・ユーモア作品、歴史、名所紹介というものが、絵入りで出版され人気を得た。月刊雑誌も出はじめ、月刊分冊という方法がとられたものもある。

物語作者として世に出たばかりで、自信のないディケンズは、新聞・雑誌に断片的に発表していたものを一冊にまとめて出版する時、当時人気を博していた方法に便乗した。『ボズの素描集』として、ユーモア画家たちと同じ方法を使い、さらに、その方面で最も人気のあった、ジョージ・クルークシャンの助けを借りた。当時の作者の心境がつぎの言葉によく表わされている。

Unlike the generality of pilot balloons which carry no car, in this one it is very possible for a man to embark, not only himself, but all his hopes of future fame, and all his chances of future success. Entertaining no inconsiderable feeling of trepidation, at the idea of making so perilous a voyage in so frail a machine, alone and unaccompanied, the author was naturally desirous to secure the assistance and companionship of some well-known individual, who had frequently contributed to the success, though his well-earned reputation rendered it impossible for him ever to have shared the hazard, of similar undertakings. To whom, as possessing this requisite in an eminent degree, could he apply but to George Cruikshank? The

application was readily heard and at once acceded to: . . . . .<sup>3)</sup>

ウィリアム・ハウガース (1697~1767) は絵で社会を写し、物語を語り、風刺・批判した。友人ヘンリー・フィールディング (1707~54) らの「一代記」ものをまねて 'progress' (「遍暦」) ものとしていくつかを結実させた。ハウガースの1枚の絵の多弁さは驚ろくばかりである。その流れは数十年を経て、その写実性は変質したものの、トマス・ローランドソン (1756~1827)、ジェイムズ・ギルレイ (1757~1815)、ロバート・クルークシャンク (1789~1856)、ジョージ・クルークシャンク (1792~1878)、ロバート・シーモー (1800?~1836)、ハプロット・ブラウン (1815~1882) という人たちに引き継がれ、発展し、さらに『パンチ』を中心に寄集った多くの風刺画家たちに引き渡された。ハウガース自身もトラスラーの『道德的ハウガース』(1831) などによって復活し、ディケンズの青年時代には街のあちこちの店の壁に貼られているのが見られたという。晩年の作者の住居ギャツヒル館にもハウガースの複製が飾られていたというので、作者が近親感を持っていたのが分かる。'It would require the pencil of Hogarth……'<sup>4)</sup>といった表現も作品中に見られる。

一方、ディケンズは文章で社会を写し、物語を語り、風刺した。ハウガースの友人H. フィールディング『トム・ジョーンズ』、T.スモーレット (1721~1771) の『ペリグリン・ピクル』、『ハンフリイ・クリンカー』などは少年時代のディケンズの愛読書で、それらの作品の主人公と自分を同一視した記述が自伝的断片の中に見られ、また、初期の作品の手本ともなったものである。従って、彼の作品が挿絵と結びつくのは当然であったといえる。

このようにして上がり始めた気球を、さらに高く上昇させるきっかけを作ったのは当時のもう1人の人気挿絵家R.シーモーであった。彼はロンドンのスポーツマン達の失敗をユーモラスに描くことによって時流に乗ることを思い付き、いくつかの出版社に持ちかけた。それが巡り巡ってディケンズに結びつけられ、さらに迂余曲折を経て、ディケンズの代表作の一つ『ピクウィック・クラブ遺文』が生まれたのである。これはディケンズの才能と芯の強さと運命の女神のなせる業である。

## 2

*Nonsuch Dickensiana* (1937) の中のT.ハットンの編集した一覧表によると、ディケンズの存命中に出版された本の挿絵の版は877の通し番号がつけられている。それによって数えると、H.K.ブラウン (572)、G.クルークシャンク (100)、M.ストウン (65)、G.キャタモウル (39)、J.リーチ (27)、L.ファイルズ (14)、R.ドイル (10)、C.スタンフィールド (9)、F.ウォーカー (8)、D.マクリース (7)、R.シーモー (7)、J.テニエル (6)、

G.ピンウエル (4), W.M. (4), F.ストウン (3), ランドシア (1), S.ウィリアムズ (1) という内訳である。同じ番号下に 2 人の名があったり、分冊表紙を入れなかったり、フロンティス・ピースやヴィネットを数に入れたり、入れなかったりで、その基準がどうなっているのか理解に苦しむが、大体の傾向は分かる。そうしたものを入れるとも各画家に若干の数を増すことになる。注目すべきは R.シーモーの場合で、ディケンズの挿絵における重要さにもかかわらず、『ピクウィック・クラブ』の 7 枚、月刊分冊の表紙絵、ライブラリー・オブ・フィクション版『ボズの素描集』の 2 枚を加えて、10 枚とは少ない。ただし、『ピクウィック・クラブ』の第 1 分冊 4 枚についてはシーモー自身による複製の版が作られていたことが確認されたという。<sup>5)</sup>それらはハットンの表には記載されていない。すべてを入れて 14 枚、やっと 6 位に並ぶ。

『ピクウィック・クラブ』の月刊分冊の表紙は R.シーモーによって描かれ、彼の当初のもくろみどおり、すべてスポーツ関係の絵である。青（クラレンドン社版）又は淡い緑青（復刻版）の用紙に、中央やや上部に枝片によって、‘PICKWICK CLUB’の字が組まれ、その上下に他の題名や作者等の文字がある。上辺に紳士が 1 本の樹上の小鳥を左ききで狙い、発砲した瞬間の図。左右側辺は釣竿、網、弓矢、鉄砲などが月桂樹と思われる葉のついた若枝で結ばれ、立てかけてある。下辺はテムズ河に浮かんで、杣に繋ながれた小舟には居眠りをしているピクウィック氏が椅子に坐り、眼鏡は鼻先までずり落ちている。どうやら釣竿には魚がかかっているらしく、おやつを入れた籠には小鳥が集まり、飼をついばんでいる、のどかな昼下りの風景である。ピクウィック氏の体型については、始め細身の紳士をシーモーは予定していたが、出版社側が異を唱え、丸く肥った現状の姿になった。円満な容貌になるのはフィズの出現を待たねばならなかった。

分冊では挿絵は巻頭に集められ、当初は頁数のみ書かれ、13 号以後は関連頁数も書かれなくなった。挿絵に表題がつけられたのは、合本になってからである。復刻版の挿絵は左開きの形で締じられている。後述の『ドンビイ父子商会始末記』の場合は 2 枚を左右見開きの形になっている。

第 1 図「クラブ員に演説するピクウィック氏」で、シーモー自身が作成した 2 枚と 1838 年ブラウンによる 1 枚と合計 3 枚の版がある。ピクウィック氏は椅子上に立ち、会議室の長方形のテーブルを囲んで坐っている 12 人の会員に演説している。テーブル上には 3 冊の本、メモ用紙、飲物コップ、中央奥の人物の前には木槌がある。何人か、パイプたばこをふかしている。手前の床には、釣道具、鉄砲などを締めて結んだ荷物が置いてある。議長の後方の壁面には中央に会長ピクウィック氏の肖像、犬が疾走する続き絵、その下辺には馬や鉄砲をかついだ人や釣をしている人の絵。さらに、向って左側の壁にも鉄砲を横に立てた狩人がいるが、分冊本のは右側に、合本のブラウンのは左側に立てている。また、ピクウィック氏の右隣の紳士はシーモーの版ではこわい顔をしているが、合本ではにこやか

な柔和な表情になっている。その他の会員の表情も好意的になっていて、構図は同じでも、印象はだいぶ違う。

第2図は「喧嘩早い馭者」で、シーモアの2枚とブラウンの1枚の版がある。旅支度をして街に出たピクウィック氏一行が喧嘩早い馭者に密偵と間違われる場面だが、右背後のホテルのボーイ、左側奥の女性が2枚とも違っているが、全体の印象には差はない。

第3図は「利巧な犬」もシーモアの2枚とブラウンの1枚の版。主人について来た犬が森番の出した注意書に、侵入した犬を殺すと書かれているのを見て、森に入るのを躊躇している。ブラウンの犬はいくぶん胴がくびれて軽快で、聡明さを感じさせる。

第4図は「スラマー軍医のジャングルへの挑戦」もシーモア2枚、ブラウン1枚の版がある。以上のシーモアの第1～4図の2枚目の版はハットンの表には記載されていない。軍医が舞踏会でのジャングルの振舞に腹を立て、タップマン氏と自室に戻ろうとするジャングルの手を上げて呼びとめ、決闘を申し入れるが無視される。手を上げることは作者の申し入れによって改められたことが試作の訂正によって知られる<sup>6)</sup>。試作では階段途中の人物についても大分違っているが、分冊・合本とも完成品の方はジャングルらの他に1組の男女の構図は同じである。しかし、シーモアの方はその女性が初老の紳士の妻なのか、娘なのか、あいまいである。ブラウンの場合は若く、すっきりした、さわやかな娘の印象で、軍医のむさくるしい、厳しい様子と対比的である。

第5図は「瀕死の道化役者」で、旅人の挿入話である。これはディケンズが時間かせぎのために入れたといわれているもので、シーモアの当初のもくろみとあまりにもかけ離れていたため、彼に大きな衝撃を与え、さらに、試作を見て、妻はもっと若く、道化役者はあまり悲愴な表情をさせず、全体として孤独感と同情心をかき立てるものという難かしい注文をつけた絵である。この絵を仕上げた直後シーモアは自殺したという因縁の作品である。これを含めた、次の2枚は、自殺の知らせを受け、駆けつけた出版社の者が持ち帰って第2分冊の挿絵にしたという。「道化役者」の分冊と合本を比べると、分冊は道化が憔悴し、聞き手は端正な印象、合本は道化がより力強く、聞き手は紳士としてはうらぶれた感じで、訴えられてもどうしようもない感じが強まり、作者の希望により近づいているといえる。ところで、コーエンによると端正な聞き手の絵はブラウンのものになっている<sup>7)</sup>。2分冊目ではまだブラウンは登場してない。クラレンドン版も復刻版と同じなのでコーエンの間違いであろうか。

第6図は「帽子を追いかけるピクウィック氏」で軍隊の演習を立て、馬車で見ている人たちが風に吹き飛ばされる帽子を追うピクウィック氏を見ている場面である。シーモアの分冊では腹を立てているような表情の人がいるが、ブラウンの合本の方は当惑、驚ろき、面白がるといった多彩の表情が見られる。

第7図は「暴ばれ馬をなだめるウィングル氏」で乗馬に慣れているはずのウィングル氏

が道の途中で馬にてこずらされ、ピクウィック氏が駆けつけるもので、合本の方がウィンクル氏の当惑をより示していて、馬車のスノドグラス氏は上手に描かれているものの、無表情・無関心が感じられて、一長一短の効果になっている。

第3分冊からはシーモーの変事のため、挿絵は2枚になった代りに、頁数は24から32に増やされていて、バスが臨時の代役をしている。

第8図は合本では略されているため表題はないが、バスによる村のクリケット試合である。打球が投手の帽子に当り、帽子が飛ばされるという劇的な場面だが、打者の姿勢、投手姿勢も静的で、背景の人物も同姿勢・同一表情で変化に乏しく、グラウンドの草以外は手を抜いた感じで、シーモーのと比べると白けた感じがする。

第9図は同じくバスの絵で、庭のあずま屋でタブマン氏がウォードル老嬢と逢引をしているところを運悪く居眠り少年が目覚まして見られてしまったものである。バスはあずま屋を正面から見て、画面いっぱい描き、木の葉を細かく描いているが人物は淡白に描いているため前図同様白らけた感じがする。同じ場面を描いたブラウンはあずま屋を半分にし、木の葉もほどほどにし、右側には母屋を描き、変化をつけていて余裕が感じられる。後の合本版ではブラウンのあずま屋が「太った少年この時だけ目覚める」という題で第8図に入り、第9図は「『さけ』にあてられたウォードル氏と友だち」で、クリケット試合見物後の夕食で全員が大酒を飲み、夜中に前後不覚でウォードル家の台所へ戻り、てんでに酔態を演じている絵が入れられた。

第10図は「転覆」で、ウォードル嬢がジャングルに欺かれて駆落ちしたのを追ったウォードル氏、ピクウィック氏の馬車がひっくりかえった場面。フィズ、すなわち、ブラウンの分冊への初めての登場である。従って、まだ‘Phiz’の署名はなく、‘N.E.M.O.’を名乗っていた。分冊ではピクウィック氏は横倒しの馬車から馭者に助けられて、こわごわ地上に降りようとしていて、ウォードル氏は怒って逃亡者たちに向って拳を突き出している。馬はすでに馬車を離れ落ち着いている。それに対し合本ではピクウィック氏の眼鏡は鼻から落ちそうで、いっそう怖わがっている。ウォードル氏はいっそう高く拳を上げている。馬はまだ興奮していて、落ちつかない様子が出ている。もう一人の馭者は馬をなだめつつ、ピクウィック氏の方を見ている。こちらでは車輪はそのまま溝に横倒しになった形。分冊では車輪はばらばらになっている。合本の方は画面が動的でフィズの図案技術の向上が見られる。

第11図は「サムエル・ウェラー君の登場」で、白鹿亭の中庭でサムがお客さんの靴を磨いているところへ、ジャングルを追ってウォードル氏とピクウィック氏が近寄り、訊ねる場面。分冊と合本の全体の構図は大差ないが、サムとウォードル、ピクウィックの表情が明るく動きが出ている点、合本の方がすぐれている。また、分冊ではピクウィック氏らと背景の建物近くの人物たちとの中間に、1人の人物が荷物の上に寝そべっているが、奇妙に

も背後の人物より小さい。恐らくそのために合本では省略されている。ただし、犬はどうか。分冊でピクウィック氏に近づいている犬には警戒心が感じられるが、合本の犬は明瞭になっているものの、初めてのピクウィック氏らに好意を示している感じがする。警戒心を持たせる方が理にかなっている気がする。

第12図は「ピクウィック氏に抱かれるバーデル夫人」で、分冊は硬直した夫人がそのまま斜めに倒れピクウィック氏に抱かれている。実際にはありえないが面白い。合本では体を曲げて寄りかかっているの、気絶したふりをしている。夫人の子どもは分冊では下を見てピクウィック氏の脚を蹴っている。合本では顔を上げています。この方が画面に変化はあるが、分冊のも面白い。その場を見ってしまう3人の会員の表情も驚ろき、当惑など多少の変化はあるが、もっと大きな違いは小道具によって象徴的な意味を持たせる技法の導入である。暖炉上の壁面には分冊では絵がかけられているが、絵そのものは不明。それが合本では寝そべるニンフと思われる女性にキューピットが矢を射ている。明らかに恋の誕生を示す。暖炉だには左右に花をさした花びん、中央に時の神が大鎌を持って上に腰をかけている時計。特にそれがピクウィック氏の頭上にあること、そして『花が夫人の方にあることは「老年」と「若さ」を示し、2人の関係を皮肉っている』とM.スタイグは述べている<sup>8)</sup>。

第13図は「イータンスウィルの選挙風景」。プラカードを持った支持者にも分冊と合本では多少相違はあるが、にわか造りの演説檯というべき所の中央にいる市長の姿勢が分冊では直立して、威儀を正して、群衆に向い静粛を求める振鐘を鳴らしているが、合本ではその混乱に腹を立て、やけになって鐘を振っている。分冊でのプラカードの字は判読しにくく、数も少ないが、合本では数も多く、読みやすい。なかには故意にであろうが‘NO SLUMKEY’が逆になったものもある。Zが逆のものもある。また、合本では群衆の中央にすりらしき者がいて、前の人のポケットに手を入れている。

第14図は「レオ・ハンター夫人の仮装昼食会」。これは作者がピクウィック氏が山賊の腕をとることと女主人のミネルヴァをもう少し若くすることを望んだものである。結局ピクウィック氏は腕をとらなかったし、ミネルヴァがどの程度若くなったか、試作が参照できないので不明だが、コーエンは作者の満足がいくようになったといっている<sup>9)</sup>。合本では目のつく変化は山賊が山賊らしくなり、ピクウィック氏の表情が目が大きく活気が出た。同じことが背後の人物についてもいえる。他に前面の池、あずま屋の一部がなくなり、高いところにあった鳥かごの小鳥が低い所に吊り下げられている。全体が引き締まった。

第15図は「女子寄宿学校での突発事」はまたもジングル一行の策略にかかり、ジングルが寄宿学校の女相続人との軋落話を真に受けたピクウィック氏が夜忠告のため学校に行き、大騒ぎを起す話。もの音に気づいた先生や生徒がこわごわ外の様子を見に来る場面で、この絵は本文と多少食違うことがキトンによって指摘されている<sup>10)</sup>。分冊、合本の基本的な

構図は同じだが、一番の違いは合本ではドアの隙間から覗いた女生徒がピクウィック氏を見つけて、大声を出したために皆がいっせいに驚ろき、大きく目を見開いた瞬間をとらえていることである。

第16図は「留置所のピクウィック氏」で、酒に酔い不法侵入したピクウィック氏を家畜の囲い場に入れ、ピクウィック氏が目を覚ますと村人が周囲に集り、からかったり嘲笑したりしている場面。分冊ではろばが重なるように2頭いるが、合本では一頭ですっきりさせている。動物は原文にはないが、ブラウンがろばと豚を描き加えたことにより‘folly’と‘gluttony’を示し、背景の教会は神の許しを示すとパトンと言っている<sup>11)</sup>。

第17図は「弁護士事務所でのピクウィック氏とサム」。バーデル夫人の告訴状を受け取り、主従が弁護士の事務所に出頭した場面。分冊、合本ではサムが多少違って描かれているものの根本的な差はない。

第18図は「ヘイリングの老人への最後の訪問」で、気に入らぬ娘の結婚に腹を立てた親が娘を見殺しにしたため、その夫が後に親に復讐する挿入話の一場面。分冊・合本とも場面は同じだが、復讐心に燃えた婿の顔はいっそう厳しく、落ちぶれた父親の表情はいっそうの恐怖心を表わしている。

第19図は「二人部屋の中年女性」で、イプスウィッチの宿で、部屋を間違え、中年女性の部屋に入り、出るに出入れず困惑するにピクウィック氏。分冊の女性の顔は面長で、大づくり、合本では可愛らしく、小心な感じがして、後に大騒ぎをすることを予告している。ピクウィック氏は寝台のカーテンから顔を出しているが、分冊では驚ろきの感じ、合本では困惑の表情が出ている。この点はコーエンも指摘している<sup>12)</sup>。女性の姿勢にくつろぎが見える。

第20図は「ウェラー君イプスウィッチの警官隊を襲う」で、中年女性の訴えによって決闘を執行する疑いで逮捕、連行されるピクウィック氏を救うべく、サムが主人を乗せた椅子駕籠を運ぶ警官隊を襲う場面で、分冊・合本で大差はない。ピクウィック氏を運ぶ椅子駕籠の大きさの非現実性は指摘されている<sup>13)</sup>。

第21図は「マズル氏の台所でジョブ・トロッター、サムと出会う」で、サムがメアリーに御馳走になっているところへ、その家の主人にとり入っているジングルの手下トロッターが台所へ入ってくる。合本のサムは分冊の童顔と変わり、面長の大人の顔になっている。メアリーも分冊より目が大きく描かれ、可愛らしくなっているが、構図には大差ない。画面手前には小さい台の上の大皿で小猫が盗み食いをしているところへ、大きい猫が近づき見ているのはサムとトロッターの関係を示している。

第22図は「ウォードル家のクリスマス・イヴ」だが、ここからは合本においても題はつけられなくなった。つけられたのは後になってからである。中央にやどり木の下でピクウィック氏が老夫人と踊り、他の者たちもそれぞれお目あての女性と踊っている。分冊と



合本の大きな違いは、分冊ではピクウィック氏は老夫人と同じ背丈になっているが、合本では少し大きくなっている。分冊の画面手前で犬が猫に近づき、猫が手を上げている。これについては親愛、反感の両方の解釈があるが、スタイグの反感の方が妥当であろう<sup>14)</sup>。合本では前面の2匹の猫はなく、ピクウィック氏の足元においている。あまり猫を利用することを避けたのであろう。

第23図は「小鬼と墓掘り」で、小鬼を立った墓石の上に坐らせる分冊の図ができるまでには何段階かあった。合本では墓掘りの表情がより多く恐怖心を表わしている。

第24図は「ピクウィック氏のスケート」で、誰もスケートをつけていないことがキトン等によって指摘されている<sup>15)</sup>。また、ウィンクル氏の転倒が描かれているが、それはピクウィック氏のすべり出す前のことで、原文との不一致を示している。合本では背後の女性見物人に肩かけをさせたり、襟を描き加えたりしている。

第25図は「サージャン・スナビン氏との初会見」で、ピクウィック氏が高名な弁護士に会うが、頼りない感じを持つ。両者の差違はほとんどない。

第26図は「ヴァレンティンの手紙」で、サムがテーブルに向い手紙を書いている脇で大きな父親がパイプたばこをくゆらせつつ、自分の経験に照らして、求愛への疑問をほのめかしている。分冊の暖炉棚の上のギネス黒ビールの宣伝文中の‘…DUBLIN…’のDとNは逆向きになっている。*THE DICKENS PICTURE-BOOK* by J. A. Hammerton (London: The Educational Book Co. Ltd.) の絵は合本のと極めて似ているが、左側のドア陰の女性は明らかに違う。これはどう考えるべきだろうか。

第27図は「裁判」で、バーデル夫人事件について法廷で検事の厳しい尋問にピクウィック氏が反論したい衝動に駆られるのを弁護士が自分の口に指をあてて、沈黙を守るよう忠告している。もともとピクウィック氏は眼鏡を鼻先までずらしているのであるが、分冊の絵のピクウィック氏は特に眼鏡をさげている。合本ではその点が改まっている。傍聴席の人物達は相当違っているが、関係者の態度は基本的な違いはない。

第28図は「バースのカード遊び室」で、遊び慣れた貴婦人たちが相手に戸惑いながらカード遊びをするピクウィック氏。背後にはそれを見たり、談笑する人たちがいる、バースの立派な部屋。両者に本質的な違いはない。

第29図は「風に宿を閉め出されたウィンクル氏」。夜遊び帰りの婦人の戸をたたき音に起き、寝ぼけて戸を開けて外へ出て、風で戸が閉ってしまった。仕方なくウィンクル氏が貴婦人の椅子駕籠に乗りこもうとする。これは作者も画家も風で消えてしまったろうそくを捨ててしまったことを失念して、ウィンクル氏のろうそく立てを頭上高く上げたら面白いという作者の言葉に従って改めた絵である<sup>16)</sup>。この椅子駕籠は第20図と同じく実物より丈を高く描いている。分冊、合本に構図の基本的差はないが、合本では二階の上品な女性が見たさ半分、見たくなさ半分で顔をそむけているのは味があって面白い。

第30図は「ボブ・ソーヤの家での酒宴」で、ブリストルの街でウィンクル氏が道に迷い、尋ね寄った家がボブ・ソーヤの家で、再会を喜こんで、あり合わせの器で酒盛りをした場面。両者に根本的な構図の差はないが、分冊では室内のもの、棚等を描くのに二重、三重の線があるが、合本ではその点がすっきり改められている。

第31図は「ピクウィック氏モデルになる」で、バーデル夫人への慰謝料不払いのため、ピクウィック氏はフリート刑務所に収監され、同室の囚人たちの検分を受ける場面。両者に根本的な差はない。

第32図は「刑務所長室」で、ピクウィック氏が特に所長室を借りて眠っていたら、いつの間にかどんちゃん騒ぎが始まり、驚ろく場面。壁には「フリート刑務所規則」の貼紙が見える。歌い、踊り騒ぐ3人は差はない。ピクウィック氏の表情は多少違うものの大きな差はない。もう1人騒ぎには加わらず頭をかかえている人がいるが、この人の表情は分冊では不明瞭だが、合本では困惑と逃げ出したい表情が出ている。

第33図は「ジングルをフリート刑務所で発見」。フリート刑務所の貧乏人室に見学に行ったピクウィック氏はそこでジングルの落ちぶれた姿を見つけ、そこへトロッターがジングルのために料理を運んで入室してくるが、その後には口やかましく代金を請求する“つけ馬”が描かれている。これはホウガースの「放とう者の遍歴」(1724)の一場面からヒントを得ているとスタイグは言っている<sup>17)</sup>。トロッターの入室は本文ではもっと後になっている。窓側で受刑者の妻が枯れかけた植木に水をやっているのは受刑者の希望のなさを示す。分冊ではこの女性は整った顔をしているが、合本では目のまわりに陰をつけて、やつれた様子を出している。

第34図は「赤鼻氏の説教」で、赤鼻氏は中央で身ぶり手ぶりの熱弁、ウェラー夫人は横に坐って感涙にむせび、右側ではウェラー氏が片目をつぶり親指を赤鼻氏の方に向け「あれを見ろ」という風にかかっている。サムは椅子を後ろ向にまたいで坐り、それを前倒しにしつつ面白がって見ている。両者に差は感じられない。キトン夫人の横の炉棚の描写は不正確という。

第35図は「バーデル夫人刑務所でピクウィック氏に会う」で、ピクウィック氏とサムに出会った夫人らはあわてて逃げ出そうとし、それをピクウィック氏は胸をそらして睨みつけ、サムは帽子をとって皮肉を込めた挨拶を送っている。背後にたむろする男たちが前面の人物よりむしろ大きく描かれていて、その遠近法の不備が指摘されているが、合本でもこの点は改まっていない。分冊と合本の差は感じられない。

第36図は「異常な情況下でのウィンクル氏の帰還」で、逃亡先でアラベラと結婚したウィンクル夫婦の帰還で、背後のサムとメアリーは若い人達の新しい出発を増幅させている。この2人を加えたことは作者の要求によるという。ピクウィック氏の前にひざまづくウィンクル氏の合本での上目づかいは、ばつの悪さをよりよく示している。

第 37 図は「幻の駅馬車の幽霊のような乗客たち」で、旅商人の叔父の話の場面。右脇には目前の情景が現実か、幻か判断しかねている叔父さんがいて、中央には若い美しい女性が華やかな衣裳の貴族に丁重に手をとられてはいるが、目は助けを求めるように叔父さんの方に向けられている。周囲には長い抜身の剣や大きな鉄砲を持った陰悪な顔をした男たちがいて、今にも出発を待つばかりの馬車にも荒くれ男たちが乗っている。分冊、合本の版には大差はない。

第 38 図は「ボブ・ソーヤの旅の仕方」で、駅伝馬車で旅の途中、周囲の人たちの笑いや叫び声に不信の念を持ったピクウィック氏が馬車の屋根を見るとボブ・ソーヤが片手の徳利の酒を飲みながらも一方の手のサンドウィッチを食べている。分冊、合本間の差は倒れた子どもの足の位置や囁やし立ててる男が上げた杖に荷物がくくりつけられているといった違いはあるが、小さい。

第 39 図は「敵対する編集長たち」で、イータンスウィルの選挙以後ますます対立を深めた二つの新聞の編集長が酒場でかち合い、ピクウィック主従も含めて大乱闘になる場面。分冊、合本の版の差はほとんどない。

第 40 図は「メアリーと太った少年」で、メアリーのごちそうに喜んだ居眠り少年がメアリーにはほのかな愛を示すもので、ハットンの表には 2 枚の記述しかないが、他にもう 1 枚あり、合計 3 枚ある。構図は同じで、合本ではメアリーに耳飾りをつけさせている。

第 41 図は「ウェラー氏とウェラー氏の友人のペル氏への乾杯」で、弁護士のペルに遺言検証を依頼するに際し祝杯をあげている場面。これもハットンの表では 2 枚の記述しかないが、3 枚ある。構図の差はなく、背後の壁面の狩の絵は分冊では 4 組ほどの人馬が描かれているが、合本では 2 組になっている。

第 42 図は、合本においては冒頭にくる口絵で、中央の書斎と思われる部屋にピクウィック氏とサムがテーブルの上の恐らく、『ピクウィック・クラブ遺文』と思われる本を前にして談笑している。本棚や戸棚の上の壁面にはピクウィック氏の母親と思われる肖像があり、戸棚の上には古いかぶとが置いてあるが、これはピクウィック主従のドンキホーテ的行為を暗示しているとパトンは言っている<sup>18)</sup>。こうした書斎の場面がアーチ状に、にこやかな小人を配した教会の柱のような額縁に入れられてる。そこにはカーテンがつけてあり、芝居の幕のように左右の下辺で大笑いをした小鬼達が開けている。下辺中央には行動を共にしたウィンクル氏、タブマン氏、スノドグラス氏の肖像がある。特にスノドグラス氏は月桂冠をかぶっているのが桂冠詩人になったのであろう。この構図はブラウンはシーモーが 1836 年にトマス・K・ハーヴィ『クリスマスの本』の口絵に描いたものを真似たとスタイグは言っている<sup>19)</sup>。さらにスタイグは、この口絵の部屋は第 43 図のヴィネット表題と通路で通じているという<sup>20)</sup>。ヴィネットは喪服姿のウェラー氏が妻の葬式後、赤鼻氏が物ほしげに遺言のことを訊ねたので、怒ったウェラー氏が馬の水飲場までつれて行き、首をおさえ

て桶の水につっこもうとしているもので、ウェラーは面白がって、酒場の入口で囃し立てている。分冊では酒場の持主の‘TONY WELLER’の名が‘V’で綴られているが、合本では‘W’に改められている。「ウェラー」を‘V’と綴るか、‘W’と綴るかは作品中でも問題にされているのをブラウンは利用したのだが、‘V’がかえって面白い。

以上が『ピクウィック・クラブ遺文』の絵である。

### 3

『ドンビイ父子商会始末記』は1846年から分冊が始まり、『ピクウィック・クラブ遺文』から10年後の作品で、作者はその間経験を積んでいるが、それだけ逆に苦労したことが伝えられ、また、挿絵についても心配した。前作『マーティン・チャズルウィット』から観念的な主題を掲げて作品化するようになり、「誇り」を主題とした『ドンビイ父子商会』の深刻な場面の挿絵をブラウンが描けるか心配した。大陸に滞在中であった作者は友人フォースターを通して連絡を取り、ドンビイ氏にぴったりのある人物を心に描いていたことを伝えている。それに応えて、ブラウンはドンビイ氏の29の素描を、目ぼしいものに矢印をつけて作者に送っている<sup>21)</sup>。それらは現在のドンビイ氏に近く、長身瘦軀の、厳めしい容貌が見られるので、作者はほぼ満足したのであろう。

月刊分冊の表紙はかなり程度まで物語の内容を伝えている。中央に‘DEALINGS with The Firm of DOMBEY and SON Wholesale, Retail, and for Exportation by Charles Dickens. with Illustrations by H. K. Browne, とあり、始めの‘DEALINGS’は商人の机上の伝票さしを横倒しにして、8枚の伝票の裏面に1字ずつ書いている。‘DOMBEY and SON’は、横にした元帳の上に、左は帳簿、右は運命を示すトランプであぶなっかく組立てている人物によってかかげられてる横断幕に書かれている。そのあやしげな構築物の頂点の「現金箱」の上の玉座に、ドンビイ氏が足を抜げて、“大見え”を切ったように坐っている。そこへ何人かの金の亡者が書類や紹介状、品物を持って近寄ろうとしている。なかにはころがり落ちてる人もいる。下の元帳の上には寝そべった道化が大きなパイプたばこをふかしながら、薄笑いを浮かべながら見上げている。そのパイプからの煙の中で、ドンビイ氏の左右に仕事上の商会、結婚式、赤ん坊を抱いた乳母、学校生活の場面が描かれている。元帳の下ではやや老けているが、羅針盤などの航海具の散在する中で天体望遠鏡で観測している航海士がいて、その左後方の地平線からは太陽が明るい顔で出ていて、それに向って、杖の先に袋を結びつけた若者が高く足を上げて歩いてゆく。その横には小切手帳や銀行通帳の上に乗って得意気に胸をそらせたドンビイ氏が頭と立てた親指で、横になった元帳の一方を軽々と支えている。反対の右側の地平線上には暗い顔の三日月が出ていて、一艘の船が大波に揺られ、今にも転覆しかかっている。手前には若い娘がガウンを

着た老人をいたわり助け、その右には無用になった証書類の束の上に、頭に大きな金袋をのせ、さらに、その上には元帳の一端がのしかかってきて、それに潰ぶされまいと松葉杖でかろうじて身を支えている男がいる。

月刊分冊の各号の2枚の挿絵は向い合わせに綴じられていて、この点復刻版『ピクウィック・クラブ遺文』とは違っている。第1図は「トックス女史一族を紹介する」で、乳母となるポリー家がドンビィ氏の妹チック夫人に紹介されている。この貧しいながらも纏まった一家は第2図のばらばらのドンビィ家と対比されているとスタイグはいつている<sup>22)</sup>。分冊、合本に差は認められないが、分冊の署名のうしろに「2」の文字があり、合本の署名の下には署名の続きとして「1」らしきものが書かれている。分冊に「2」が書かれているとすれば2枚の版は同時に作られたと考えねばならない。

第2図は前述の「ドンビィ一家」で、中央に椅子に坐ったドンビィ氏、奥に赤ん坊のポールを抱いた乳母、氏の後方には怖くて近寄りかねているフローレンス。彼女が部屋の外にいることはドンビィ氏の娘に対する扱いを象徴しているとリーヴィス夫人が指摘している<sup>23)</sup>。分冊のドンビィ氏は横目でフローレンスの方を見ているが、合本ではその度合が減少している。分冊、合本に構図の差はないが、分冊の署名の下に「1」らしき字がある。

第3図は「命名式の集り」。中央に暖炉を背にしたドンビィ氏が立ち、左右に椅子に坐ったチック夫婦、チック夫人の右にトックス女史、左側には乳母に抱かれたポールとフローレンスづき女中のスーザン、フローレンスは晴着を着てポールに駆け寄っている。両者に根本的差違はない。分冊の署名に「2」らしき数字がある。

第4図は「ポリー慈善グラインダズ校生を救出する」で、乳母はポールとフローレンスをつれて、スーザンとともに散歩中、息子の学校の近くへ行くと、学校へ通うのを妬んだ街の悪がきどもにいじめられている息子を見て助ける場面。ここでフローレンスの手を離し、迷子にさせてしまう。分冊にはやはり署名のうしろに「2」らしき字があり、慈善学校の生徒の肩には「147」の本文にある番号札がついている。一方、合本には「1」らしきものが署名の下に続いてあり、生徒の肩の番号札は奇妙にも「741」が逆向きになっている。何かの勘違いで逆にする仕方を間違えたのであろう。ポールを抱いているスーザンの表情は分冊では当惑と腹立ち、合本では当惑と恐れ表情を示している。第3図、第4図を見た作者はその漫画的な絵に大いに不満であったという。

第5図は「ポールとピプチン先生」で、炉端のポールが椅子に坐っておびえた表情で、厳めしい顔のピプチン先生を見ている場面。本文ではもっと年寄りで、腰の曲った、『大いなる遺産』に出てくるような老女教師を作者は考えていたので、背筋の真直な、いかつい中年女性のピプチン先生を見て大いに失望したという。ポールの椅子も不満であったという<sup>24)</sup>。しかし、股を開きかげんにして、一方を足台にのせて前かがみに坐っている先生はポールをおびえさせるに十分であり、おまけに部屋にはサボテンや枯れかけでとげを持つ

植木があり、読者には強い印象を与え、このイメージは定着した。1867年のディッケンズ版では作者自身この絵を選んでいているという。分冊、合本とも同じ版を使っている。

第6図は「カトル船長友を慰める」で、借金で身動きとれなくなった船具商の伯父をウォルターと船長が慰めている場面。船具の店らしく、船の模型、世界地図、地球儀、大砲の模型、船の絵、カンテラ、銚といったものが壁面、床上に見られる。ドア越しの店では客とも人形とも見える中年男が方位器で位置を測っている。そこにも天体望遠鏡や道具類が見られる。船長の片手は鉤の偽手で、その左右が問題にされるが、ここでは右手。分冊、合本とも同一だが、署名のうしろに「1」らしき字がある。単なる線ともとれる。ハットンの表には1枚の版の記述しかない。

第7図は「プリンパー博士の学校の小紳士たちの散歩」。ポールの学ぶ学校の校外散歩風景で、生徒たちは盛装して、あくまで整然と海辺を歩いている。ポールは弱々しく、しんがりの先生の横を歩いている。近所の学校へ通えない貧乏なはずら坊主たちが、道脇の鉄柵で鉄棒回転をしたり、からかい半分に見ている。何人かの学生は彼らを横目で見ている者もある。ポールも鉄棒遊びの子を見ている。背後には海水浴を楽しむ人のための脱衣車があり、ろばに乗って楽しんでいる父子、空には風が上げられている。分冊の風にはとりすまして笑っている表情がある。合本ではこの表情が複雑な横線で隠されている。漫画性を少なくするためであろう。

第8図は「ポールの宿題」で、体の弱いポールに代って姉のフローレンスが宿題や予習を夜遅くまでやっている。そばの椅子でスーザンが居眠りをしている。分冊、合本とも構図に差はないが、分冊ではスーザンは口を閉じているが、合本では口を少し開いて、だらしく眠っている。この図と第7図はなぜか署名がない。

第9図は「ポールの休暇帰宅」で、ポールが家に帰る送別の場面。ポールはフローレンスに背後から抱かれる形で守られ、プリンパー博士一家、友人たちとともに召使いたちも出揃っている。何人かの男の生徒はポールよりアイスクリームに興味があり、そちらに集っている。分冊、合本とも同一版であるが、ハットンの表には別の版があることを示している。理由はわからないが、分冊のこの絵と第10図は順序が前後して綴じられている。

第10図は「カトル船長の深い瞑想」で、借金と交換の海外出張命令についてのウォルターの相談に考え込む船長。船長は片足を椅子にのせて、ひざにひじをのせ、鉤手をかみながら考え、ウォルターは後ろ向きの椅子に坐り、答えを待っている。分冊、合本とも同一だが、ハットンの表には別版があることを示している。

第11図は「可哀そうなポールの友」で、ポールが飼っていた犬をフローレンスが引きとり、自室で喜びはねる犬と淋しく戯れるフローレンス。犬の足が後方にある食卓の掛布を引きずり落とし、その上にあった何冊かの本が落ちかけている。分冊、合本とも同じだが、*THE DICKENS PICTURE-BOOK* には別版が載っている。ハットンの表は1枚のみの記

述である。また、前号と同じく、第12図と前後して綴じられている。

第12図は「見張りに立つ木彫の海軍少尉候補生」で、旅立つウォルターにフローレンスが別れの挨拶にスーザンと店を訪ねる場面。彼女は戸の把手をとりながら木彫の候補生を見上げている。14歳にしては成熟しすぎているとキトンによって指摘されている<sup>25)</sup>。分冊、合本とも同じだが *PICTURE-BOOK* には店の飾窓の上の 'SHIPS INSTRUMENT' の字がなく、別版があることが分かる。ハットンの表には1枚しか記載されていない。

第13図は「バグストック少佐その機会を得て喜ぶ」で、レミングトン保養地で少佐がスキュートン夫人母子と会い、ドンビィ氏に紹介する。中央に夫人が車椅子に坐り、イーディスが後で押している。背景では馬上の乗馬服の婦人に挨拶する男、二人の女性に近寄る男など、この場面は女性優位を示すとスタイグは言っている。ドンビィ氏は右隅で帽子を上げ丁寧に挨拶している。おつきの黒人の服装が試作段階では自国のものであったが、作者の希望で洋服にされたといわれる。背後の建物の 'HOTEL' の字は逆向きになっている。分冊、合本とも同一で、ハットンの表も1枚になっている。

第14図は「トゥーツ氏あせり、ディオゲネスも、また」。ポールの友人で、フローレンスを恋しているトゥーツ氏はフローレンスとの間が進行しないのにあせり、スーザンに近寄る。それについて奇妙な雰囲気を感じとった犬のディオゲネスは吠えつつ、トゥーツ氏の足に絡みつく。戸のガラス越しに男が覗いている。分冊、合本とも同一版で、ハットンの表も1枚となっている。

第15図は「バンズビィ氏への重大な言及」。海外へ出たウォルターの船の遭難の知らせにソル老人、カトル船長、フローレンスらが、船長の友人のバンズビィの所へ行き、海図を前に相談している。上の天窓からは、今はカーカーの密偵となっているポリーの息子ロブが様子をうかがっている。壁面には荒波にもまれる船の絵があり、相談の内容を暗示している。ここではカトル船長の鉤手は左になっている。分冊と合本では版が違うが、ハットンの表には1枚の記述しかない。合本の絵の署名のうしろには「1」の字が見える。

第16図は「カーカーがフローレンスとスケトル一家に自己紹介する」。フローレンスはスケトル家と交際し、その散歩中にカーカーは馬に乗って近づき、馬上より愛想笑いをし、挨拶する。スタイグによると馬が首を下げているのはカーカーが欲しいものを掴もうと手綱を強く握り締めているためであり、背景であひるが逃げたり、ろばが怖えたように立ちどまり、犬が吠えつつ走り寄って来るのはフローレンスのカーカーに対する恐怖心を表わしているという<sup>26)</sup>。ハットンの表では1枚しか記されていないが、分冊ではカーカーの歯が大きくむき出ていること、背景の婦人が合本では背を丸めていることから両者の版が違うことが分かる。

第17図は「ジョー・ビーは手ぬかりなしですよ、全く手ぬかりなしですよ」で、バグストック少佐はドンビィ氏らと食事をしつつ自分のことを自画自賛し、ドンビィ氏にイー

デイスを売り込んでいる。場面は中央にカーカーが坐りドンビィ氏は脇に坐りうつむきかげんで、厳めしさはなく、やさ男となっている。背後の壁には、スターン『トリストラム・シャンディ』のトビー叔父のウォドマン未亡人への求婚の場面の現存の絵で、その作品には性的不能が暗示されていることから、ドンビィ氏の性的不成功を暗示し、皮肉っているとスタイグは言っている<sup>27)</sup>。これも分冊と合本は同一の版だが、*THE DICKENS PICTURE-BOOK* には別の版が出ている。ハットンの表は1枚になっている。

第18図は「ドンビィ氏娘のフローレンスを紹介する」。再婚話がまとまり、フローレンスをスキュート夫人とイーデイスに紹介する場面。フローレンスの背後の壁面には彼女の母と思われる女性の肖像画に掛布がしてあるが、これは同時にドンビィ氏の行動を覗き見しているとも受けとれる。分冊と合本は同一版だが *PICTURE-BOOK* には別版が載っている。これもハットンの表では1枚となっている。

第19図は「チック夫人のルクレチア・トックスへの開眼」。秘かにドンビィ氏との結婚を期待していたトックス女史はドンビィ氏の再婚を知り驚きのあまり失神し、チック夫人は初めてトックス女史の真意を知り、驚き、あきれる。壁面の絵の男性も驚き、眼鏡をかけ直し、身を乗り出している。分冊、合本とも同じ版で、ハットンの表にも1枚の記述しかない。

第20図は「教会からの帰宅」。結婚式を済ませてドンビィ氏らが家に入る場面。華やかな行列を見ている群集の中にはカーカーに捨てられ、ドンビィ商会に恨みを持つ、「やさしいブラウンおばさん」母娘がいる。後方ではこの結婚を皮肉るように、パンチとジュディの人形芝居が行われている。また、フローレンスの犬が別の犬を追いかけるが逃げられてしまう様子が描かれている。これはフローレンスが助けを求めても逃げてしまうイーデイスを暗示している。分冊、合本とも同一版で、ハットンの表も1枚の記述である。

第21図は「立派なお客さま」。船長の店で、ポリーの息子ロブがトゥーツ氏がつれてきたボクサー上りの大男を賛嘆の目で見ています。これは店から居間に向って見ている場面。地球儀、望遠鏡の他に候補生もいるが、それは帽子を被っている。分冊、合本とも同じ版。ハットンの表も1枚のみ。

第22図は「拒まれた施し」。「やさしいブラウンおばさん」と娘が同情されて小銭をもらったが、娘は自分を捨てたカーカーの身内を知り、その施しを投げ返す場面。分冊、合本とも同一版で、ハットンの表も1枚のみ記されている。

第23図は「家でドンビィ夫人」。夫人が多くの人名に囲まれているが、フローレンスは不信の目で見上げている。中央の空間は中心の不在とコーエンはいう<sup>28)</sup>。分冊、合本とも同一の版だが、*PICTURE-BOOK* には違う版が載っている。フローレンスは下を向き、諦めと無関心の表情が見える。ハットンの表には2枚の記載がある。

第24図は「トックス女史トゥードル家を訪ねる」。期待に破れたトックス女史がトゥー



ドル家を訪ね、人間らしい心を取り戻す場面。貧しいながらも子どもたちは父にまわりつき、明るい笑い声を立てている。ただ、長男のロブだけはトックス女史を横目で、うさくさげに見ている。分冊と合本は同一版だが、*PICTURE-BOOK* には違う版が載せられている。ハットンの表には2枚あることが記されている。

第25図は「海軍少尉候補生号、敵船に接舷さる」。家賃不払いで逃げ出してカトル船長の預かる船具店へ来ていたバンズビィは家主の未亡人へ乗り込まれ、子どもたちに捕えられてしまう。分冊と合本では違って、特に壁面の絵の船に合本では'MEDUSA'の名がある。これはジェリコの「いかだのメドゥーサ号」を暗示するとコーエンはいう<sup>29)</sup>。スタイグはメドゥーサであるイーディスとドンビィ氏の関係を示しているという<sup>30)</sup>。確かにフローレンスから逃げるイーディスを「メドゥーサ」と呼んでいる。それでブラウンは合本の版で名を書き入れたのであろう。ハットンの表には1枚の記述しかない。

第26図は「偶然の出会い」で、スキュートン母娘と「やさしいブラウンおばさん」母娘の荒野での出会い。イーディスは相手の母娘の中に'so like an exaggerated imitation of their own'<sup>31)</sup>を見た。分冊、合本は別版だが、ハットンは1枚のみ表に記している。

第27図は「ドンビィ氏と彼の『忠実なる部下』」。2人が朝食の食卓について、背後にはイーディスの肖像が掲げられている。そして、2人の間には鳥籠に入れられたオウム。もはや忠実な主従関係ではなく、イーディスを加えた三角関係である。足元の犬はその成行を見守っている。スタイグによると壁のもう1つの絵は沐浴をするダイアナを見るアクティオンで、裸を見られたダイアナは怒ってアクティオンを八つ裂きにしてしまい、これはカーカーの運命を示しているという<sup>32)</sup>。分冊と合本は版が違うが、ハットンの表にはその記述はない。

第28図は「フローレンスの古い友との別れ」。フローレンスのことでドンビィ氏に直訴したスーザンは解雇される。中央ではフローレンスとスーザンは泣いて別れを惜しみ、戸口では家政婦となったピプチン先生が今や遅しとスーザンの退出を待っている。部屋の奥ではイーディスが女中に髪を平然と結わせている。分冊、合本は同一版だが、ハットンは1枚としている。

第29図は「茫然と認識」。イーディスとのこと、自分の立場のことなど思いながら茫然として馬で会社へ行くカーカーとそれを物かげから見つめるアリスと母。横の建物の壁には街で見かけのように多くの広告が貼られている。分冊、合本とも同じで、中央部分に'--- SHANK/--- TLE'は当時話題になり、ディケンズが厳しく批判した、クルークシャシクの『ボトル』で、飲酒による不幸を訴えた絵物語。'TO THOSE ARE TO MARRY'は皮肉である。スタイグによると'--- BAL MASQUE'はアリスの身を秘めた行動を暗示。'MOSES'は洋服屋の名だが、当然「十戒」を連想させる。'THEATRE CITY MADAM'は1844年に上演されたマッシーンガー作『都会夫人』で、主人公の振舞はカーカーの行動と

酷似し、二重写しになっているという。ハットンの表には1枚の記述しかないが、これには別版があり、*PICTURE-BOOK* には 'CRUIKSHANK BOTTLE' がはっきり出ていて、他に 'DOWN AGAIN 6 ---', 'OBSERVE ---' などが見られる。分冊、合本ではSがすべて'逆'となっているが、*PICTURE-BOOK* では改められている。

第30図は「階段でのフローレンスとイーディス」。フローレンスは母への愛をイーディスに求めたにもかかわらず、彼女は逃げてしまった。階段の脇や壁面にある彫刻や絵はそれぞれ意味がある。コーエンによると鳩を抱いた少女、「夜」と「昼」の母子像はイーディスの母としての能力を示すという<sup>33)</sup>。しかし、それを示さなかったのであるから、もう一步の説明がほしい。スタイグによると、「鳩を抱いた少女」は純潔のみならず、精神的な愛をも示すという。階段の左横の像はアガメムノンが娘イフィゲニアを犠牲にする場面。右側のほりんごを手にしたヴィーナスで、「パリスの審判」にもとづき、アリス、フローレンス、イーディスの三人からカーカーによって選ばれたイーディスだという。踊り場の二面の絵はトゥアヴァールソンの「夜」と「昼」で、その母子像はイーディスの不利な立場を暗示している。動物に股がった女はT. W. ヒルは『妊精女王』に基づく「ウナとライオン」と言っているがスタイグはパンサーに乗ったアリアドネという。テーセウスのドンビィ氏はアリアドネのイーディスを捨て、ディオニソスのカーカーが彼女をパンサーに乗せて行くところという。ただし、その意図がどこまで読者に伝わるか疑問だとしている<sup>34)</sup>。分冊、合本は同じで、ハットンの表も1枚と記しているが、*PICTURE-BOOK* には別版が載せられている。

第31図は「小さな客間に映る陰」で、カトル船長とフローレンスがいる部屋の世界地図の上に突然ウォルターのものらしい陰が映り2人は驚く。この部屋は数回出てくるがその都度、間取り、道具の位置、ドアの開く方向などが違う。画家に一貫性を持たせる意図がなかったといえる。分冊と合本とは違うが、ハットンの表では1枚になっている。

第32図は「ドンビィ氏と世間」。中央にいる破産したドンビィ氏に今までへつらって来た少佐が責め立てている。少佐は杖を前へ突き出し、おどしている。人間の目だけでなく、世界地図も2つの大きな目の役を果たし、室内の肖像や胸像も花びんの模様も顔のようである。半分布でおおった前夫人と思われる女性も心配気にのぞいている。華やかさの象徴であるくじゃくの羽根も倒れながらもドンビィ氏を見ている。暖炉棚の花も萎れて首をたれ、大鎌を持った時の神が寄りかかった時計が時間が残り少なく、切迫してきていることを示している。作者はこの絵を喜んだという。スタイグは少佐の突き出した杖は男根の、そして、萎れた花は性的不能の象徴で、ドンビィ氏の不能と対比させているという<sup>35)</sup>。分冊と合本は別版だが、ハットンの表には1枚とある。

第33図は「秘密の知らせ」。ロブがブラウン母娘にカーカーとイーディスについての秘密を語ってしまう。戸の陰でドンビィ氏がそれを聴いている。分冊と合本は違うが、ハッ

トンの表では1枚となっている。

第34図は「カーカーの勝利の時」で、イーデイスは威丈高に立ち、手をさし出して、カーカーに椅子をすすめているが、彼は爪をかみ、落着かず、勝利にはほど遠い。後方には馬に乗ったアマゾンが戦士を蹴散らしている。中央正面には殺されている騎士のそばに憎しみをこめて女性が振り返って立っている。その女性は世の横に写っているが、その様はハウガース『現代的結婚』の「侯爵の殺害」の場面と似ているという。リード博士はアマゾンの槍も殺害者の剣もイーデイスに向けられているのは彼女が自滅的女性であることを示すという。コーエンはイーデイスはカーカーをドンビィ氏との結婚からの逃げ道として利用したにすぎないという<sup>36)</sup>。分冊と合本では違う版だが、ハットンの表には1枚しか書かれてない。

第35図は「暗い道」で、カーカーの馬車での逃亡の場面。いわゆる'dark-plate'の手法で描かれている。雲のたれこめた暗い荒野を4頭立の馬車で疾走し、カーカーは立って不安気に後方を追手が来ないか見ている。先頭の馬の頭の首筋に大鳥が止まり、横の馬がそれを見て、おびえ、離れようとするかのようにして走っている。荒野の十字架はカーカーの死を暗示するという。また、反対側の馬車の車輪の不在が指摘されている。

第36図の「到着」はフローレンスとウォルター、ソル老人、船長等の再会。トランプ遊びをしていた船長の手から数枚のカードが落ちかけている。ウォルターはすでにフローレンスの横に来ている。分冊、合本とも同一版。ハットンの表にも1枚の記載。

第37図「これから先の年月あの部屋で思い出に耽けらせよ」。破産と心労で廃人になってしまったドンビィ氏は暗い部屋に閉じこもり、フローレンスの入室にも無関心。世界地図はもはや用はなく、まるめて棚にピットの像とともに上げられている。前夫人の肖像の掛布ははずされているが、忘れられた存在に変わりなく、ドンビィ氏が見ている衝立に半分隠されている。そこには若い人たちの野外での踊り、スタイクが結婚式だろうといっている教会の前の人たち、中央の絵は羊飼いが憩う牧歌図<sup>37)</sup>。ドンビィ氏は思いふけるようにそれらを見るともなしに見ている。氏のそばの消えたりそくは氏の死の近いことを表わす。フローレンスの存在は幻想で、今光を受けてドンビィ氏の頭の中に出現したと考える人もいる。分冊と合本は違っているが、ハットンの表には1つのみ記されている。

第38図は「もう1つの結婚式」。バンズビィの元家主のマクスティンガー夫人との結婚行列。フローレンスとウォルターの結婚に対して「もう1つ」であると同時に、ドンビィ氏の豪華な結婚式に対して、貧乏人の安上りの「もう1つ」の結婚式でもある。しかし、結婚はどれも同じで、それは路に並ぶ家に貼られた汚ない広告が語ってくれる。'LA MARRIAGE FORÇÉ'の芝居の広告。老人の頭上には'WANTED SOME FINE YOUNG MEN/HECTOR/AMAZON'はアマゾンが出した男狩りの広告のよう。'SHE STOOPS TO CONQUER'も畏にかかった男を連想させる。行列の行先には柵があり'TOLLS/

HORSE ---, MULE ---, DONKEY ---, COW ---, PIG ---'と家畜の通行料金表がかかげられ、人間も家畜扱いの感じがする。その先では牛が追い立てられて行くのが見え、さらに肉屋の店先には無残にも首、手足、胴をばらばらにされた獣が軒先に吊るされている。一匹の豚は柵の外へ逃げようとしている。花婿は杖を足元に投げ出し、女性用パラソルと手さげ袋を持たされ、一方はがっちりと厳めしい女丈夫に腕をとられている。その様子を見るカトル船長はおよび腰で、今にも逃げ出しそうである。分冊、合本では版が違い、分冊の1つの広告には 'CLIPPER, SCOONER, WASP' (スタイグによると WASP=マクスティンガー夫人)<sup>38)</sup>、合本では 'CLIPPER, SCHOONER, TRIUMPH' となっている。ハットンの表には1つのみ記されている。これと第38図は分冊で順序を前後逆に綴じられている。

第39図は口絵で、合本では冒頭に来る。中央には海辺に置かれた大椅子に坐っているポール少年、その横の砂地に坐り荷物をほどこうとしているフローレンス。その背後には2人の天使が衣で2人を守るようにしている。上には赤ん坊の誕生を喜ぶ天使と死の床にある少年を悲しむ肉親たち。勉強している少年、父と「お金」について話している少年。大きな目をした怪物のような汽車にひかれるカーカー、同時にアリスと思われる復讐の女神が稲妻の剣を持って襲いかかっている。この汽車はクルークシャンクによって 'THE RAIWAY DRAGON' として描かれているのと同じである<sup>39)</sup>。海に溺れかけている男に手をさしのべる女はそばに子どもがいるから結婚したフローレンスが父を助けようとしているのだろうか。岩にかじりつき海から上る男、喜び合う男女、そばで船長が両手を上げ万才をしているからフローレンスとウォルターである。海のニンフに担ぎ上げられるソル老人、海中でひっくり返っている少佐と思われる紳士、それを見て岸で気をもむトックス女史。溺れかけた女性がキューピットのこぐ船に助けられるのはスザーンであろう。右側は死の床の母、ポールの命名式、イーディスに近寄るフローレンス、椅子に坐るドンビィ氏を見るイーディス、その後から盗見するカーカー、時の神が砂時計をかかげてもう時間がないことを知らされ嘆くスキュートン夫人。横にはがい骨が姿を見せている。上部中央は天上界で、天女が豎琴をかなで、丁度昇天した赤子が天女によって運ばれて来ている。分冊、合本とも同一版で、ハットンの表も1枚。

第40図はヴィネットで、上部に表題等、中央以下に第39章の1場面で、ロブ少年に読方を教えるカトル船長。この絵の船長の鉤手は左手になっている。分冊、合本は別版だがハットンの表では1枚になっている。

## ま と め

『ピクウィック・クラブ遺文』と『ドンビィ父子商会始末記』について、運よく、月刊

分冊という古い形で目を通すことができたので、その2作品について見て来たが、これらは何回にもわたり、何千、何万と印刷されたものの中の1実例にすぎない。同じ分冊とはいっても、印刷の途中の段階で、挿絵の版を変えることもあったかもしれない。同じく初版の合本とはいっても、分冊本を合本にしたのもあれば、改めて印刷したものもある。私が利用したものがそのどの段階のものか不明である。従って、ここで行った比較は厳密さに欠けることを否定できない。

しかし、いくつかの点が明らかになったことも、また、事実である。『ピクウィック・クラブ遺文』が生まれるきっかけはシーモーが作り、彼の意図とは別の方向に進んで展開し、彼の自殺後バスが代ったが不評で、ブラウンが選ばれた。しかし、彼はとても若く、まだ腕前は不安定であった。合本版の時にはその後気づいた点を改めているので、同じ場面でも可成りの違いが生じている。それが『ドンビィ父子商会』になると分冊、合本の差はほとんどなくなる。腕前の安定とともに、製作がほぼ同時に行われたのかもしれない。だから、分冊の何枚かに署の後に「2」の字が見られたのであろう。また、『ピクウィック・クラブ遺文』の初めでは少なかった動物、絵、品物、広告等で内心や意図を示す象徴的な方法は後半、そして、『ドンビィ父子商会』では大いに利用している。他の画家にも見られることだが、ブラウンは最もふんだんに使った1人といえよう。

T. ハットンの作った挿絵の一覧表は大変有用であることは言うまでもない。しかし、完全ではないということも心得ておかねばなるまい。シーモーの『ピクウィック・クラブ遺文』の初めの4枚に「第2」の版があったことは後に判明したことなのであろう。彼の表には記載がない。第40図「メアリーと太った少年」、第41図「ウェラー氏と友人のペル氏への乾杯」についても、計3枚あることは記されていない。『ドンビィ父子商会』についても、第15、16、25、26、27、28、31、32、33、34、35、37、38、39図については、実際に別版があるにもかかわらず、ハットンの表には一枚の記録しかない。私の作業はもちろん不完全であるが、これで全体を見直す必要があることは明らかになったといえる。

#### 注

- 1) Charles Dickens, *Oliver Twist* (London: Library Press, ?) p. viii
- 2) Arthur Waugh, *Charles Dickens and His Illustrators* (London: the Nonesuch Press, 1937) p. 9
- 3) Stephen Wall, ed. *Charles Dickens*, (Middlesex: Penguin Books, 1970) p. 43
- 4) Charles Dickens, *Sketches By Boz* (London: Oxford U. P., 1957) p. 289
- 5) 松村昌家, 月刊分冊復刻 *PICKWICK CLUB*, 別冊さし絵資料篇 (東京:名著普及会, 1985)
- 6) Frederic G. Kitton, *Dickens and His Illustrators* (New York: AMS Press, 1975) p. 37
- 7) Jane, R. Cohen, *Charles Dickens and His Original Illustrators*, (Columbus: Ohio State U. P., 1980) p. 47
- 8) Michael Steig, *Dickens and Phiz* (Bloomington & London: Indiana U. P., 1978) pp. 26~27
- 9) Cohen, *Charles Dickens and His Original Illustrators*, p. 64
- 10) Kitton, *Dickens and His Illustrators*, p. 67.

- 11) Steig, p. 29
- 12) *Ibid.*, p. 66
- 13) Kitton, p. 68
- 14) Steig, p. 32
- 15) Kitton, p.68
- 16) *Ibid.*, p.71
- 17) Steig, p. 36
- 18) Cohen, p. 65
- 19) Steig, p. 39
- 20) *Ibid.*, p. 38
- 21) Cohen, p. 92
- 22) Steig, p. 88
- 23) *Loc. cit.*
- 24) *Ibid.*, p. 89
- 25) Kitton, p.91
- 26) Steig, p. 95
- 27) *Loc. cit.*
- 28) Cohen, p. 96
- 29) *Ibid.*, p. 99
- 30) Steig, p. 98
- 31) Charles Dickens, *Dombey and Son* (London : Bradbury and Evans, 1848)
- 32) Steig, p. 99
- 33) Cohen, p. 99
- 34) Steig, p. 99
- 35) *Ibid.*, p. 103
- 36) Cohen, p. 99
- 37) Steig, pp. 107~108
- 38) *Ibid.*, p. 109
- 39) Gilbert Abbot À Beckett, ed. *George Cruikshank's Table-Book*, (London : Bell & Daldy, 1869)  
facing p. 255